

「罰ゲームな」チェア
に縛られ通話越しにチ
ーム全員に喘ぎ声を聞
かれながら中出しされ
て専属オナホに堕とさ
れる話

「……た、鷹城さん？」

「動くな」

リクライニングが最大まで倒される。ほぼ仰向け。結束バンドが右の手首に食い込んで、プラスチックが皮膚を噛む痛みに息を呑んだ。左も。足首も。キャスターの脚部に固定されて、もう指一本すら自由にならない。

RGB照明の青紫が天井を脈動してる。モニター6台の待機画面が薄暗い部屋をちらちら照らしてて、その光の中に蓮さんの顔がある。切れ長の目。左耳のピアスが3連で光を弾いた。

「ちょっ……罰ゲームって、何するんです——」

「黙れ」

ヘッドセットを被せ直された。耳を覆うイヤークップの圧迫感。蓮さんの指がマイクのスイッチを入れる。ぷつ、という小さなノイズのあと——Discordの通知音が、鼓膜に響いた。

チーム通話チャンネル。

接続中のアイコンが、ひとつ、ふたつ、みつつ——緑に点灯していく。

「今からお前の声、全員に聞こえてるからな」

血の気が引いた。蓮さんも自分のヘッドセットを装着して、同じチャンネルに入ってる。

「ま、待って、蓮さ——」

「もう遅い」

スウェットの腰紐をほどかれた。指が布の端にかかって、するりと引き下ろされる。ボクサーブリーフごと。膝の上あたりで丸まった布が結束バンドに引っかかって止まった。

深夜の空調の風が、露わになった股間を撫でる。
——見られてる。

僕の身体の、一番見られたくない場所。男としての性器の下に、もうひとつある器官。隠してきた。ずっとずっと、誰にも知られないようにしてきた。

「やっぱりあるな。カント」

蓮さんの声は静かだった。驚きなんかない。確認するみたいな、最初から知ってた人間の声。

「……え」

「知ってたよ、最初から。加入面接のとき、身体検査あっただろ。あの時点で全部見えてた」

全身から汗が噴き出した。じゃあ——あの面接の時から、蓮さんは僕のことを——

「お前を入れた理由の半分はこれだ」

(そんな——)

指先が触れた。カントの表面を、軽く、なぞるように。乾いた指先が敏感な褌に触れた瞬間、腰が跳ねた。ゲーミング

チェアがぎしっと軋む。その音をヘッドセットのマイクが拾って——

Discord越しに、チームメンバー全員に届いてる。

「やだっ、マイク切って——」

「切らねえよ」

蓮さんの指が、割れ目に沿って上から下へゆっくり滑った。

「お前さ、俺のファンなんだろ？ 配信全部見てたんだろ？ じゃあサービスしてやるよ」

指先がくぶ、と割れ目に沈んだ。乾いた皮膚が敏感な粘膜に触れて、神経がぎゅっと縮み上がる。

「う……ッ♡」

小さな声が漏れた。マイクが拾った。Discordの通話欄で、メンバーのアイコンが全部緑のまま——聞いている。全員、聞いている。

「チームのみんなにさ、お前のカントの声、聞かせてやるよ」

Tシャツを胸の上まで捲り上げられた。白い腹がRGB照明に晒されて、薄い胸板がむき出しになる。乳首は——恐怖と緊張で、もう硬く尖ってしまっていた。

蓮さんの指が乳首を弾く。

「ひっ♡」

声が出た。出てしまった。

「いい声。もっと出せよ」

(やだ……やだやだ、聞かれてる……っ♡)

蓮さんの視線がモニターに移った。チャット欄に何か流れてるのが、僕の位置からは見えない。蓮さんだけが読める角度。

「○○が『マジかよ』だってさ」

心臓が跳ね上がった。

「△△は『湊くんカントだったの？ えっ嘘だろ』だと」

「や、やめ……読まないで……っ♡」

チームメンバーにバレた。僕がカントボーイだってこと。ずっと隠してきた秘密が、Discordのチャット欄にテキストになって流れてる。全員が知った。全員に知られた。——なのに。

カントが、じわりと濡れ始めていた。

(嘘……なんで……こんな状況で、濡れるなんて……っ♡♡)

蓮さんの指がそれに気づく。割れ目をなぞる指先が、さっきより滑らかに動いた。摩擦が減ってる。僕のカントが、自分で潤滑液を出してしまっている。

「もう濡れてんじゃない」

低い声。嘲るでもなく、ただ事実を突きつけてくる。蓮さんがリクライニングをさらに深くして、座面の前端に僕の尻を引きずり出した。脚が大きく開かされる。結束バンドで固

定された足首が、チェアの脚部に縛られて——カントが完全に晒された。

RGB照明の青紫が、濡れ始めた粘膜を淫靡に照らす。

蓮さんの長い指が1本、カントの入り口に触れた。未使用の穴は固く閉じてる。けど表面はもう、ぬめっていた。

「処女なんだ？」

その言葉が脳裏に刺さった。

「……やだ……っ♡ そんな言い方……っ♡」

「事実だろ。もらっていいよな」

(やだ……っ♡ 蓮さんのファンだからって、こんな——でもカントが勝手に濡れて……っ♡♡ 身体が……言うことを聞かない……っ♡♡)

ゆっくりと指先が沈んだ。第一関節まで。固い壁を押し広げるように入ってくる感覚に、呼吸が止まった。ヘッドセットのマイクが、荒い息を全部拾ってる。

ちゅぷ、と小さな水音。

「あ……っ♡ やだ、指……入って——♡♡」

「声、抑えろよ。全員聞いているぞ」

抑えろと言いながら、蓮さんの指は止まらない。第二関節。根元。狭い壁が指を締め付けて、内臓を直接掴まれてるみたいな圧迫感に頭がくらくらする。

蓮さんの指が、曲がった。内壁を探るように。

「——ッんっ♡♡♡」

声が裏返った。指先がどこかに触れた。自分でも知らなかった場所。電気が走ったみたいに全身がびくんと跳ねて、ゲーミングチェアが大きく軋んだ。

「そこだろ」

蓮さんの声が冷静で、余計に怖い。

「ゲームと一緒にだ。弱点は——突く」

そのポイントを、執拗にこすり上げ始めた。指の腹で、ぐり、ぐり、と圧をかけながら。

くちゅ、くちゅくちゅ——

音が大きくなっていく。僕のカントが蓮さんの指を飲み込んで、自分から音を立ててる。

「ひっ♡ やだっ♡♡ そこ、だめ——あっ♡ あっ♡♡ あっ♡♡♡」

(聞こえてる……っ♡♡ みんなに聞こえてるのに……っ♡♡ 止めたいのに、カントが蓮さんの指に吸いついて……っ♡♡♡)

ヘッドセットから、チームメンバーの息遣いが微かに聞こえた。誰かが唾を飲み込む音。

——その瞬間、カントの奥がきゅうっと締まった。

(やだ……っ♡♡ 聞かれてるって思っただけで……カントが反応して……っ♡♡ こんな、おかしい……男なのに……っ♡♡♡)

羞恥が興奮に変わる。聞かれてるという事実がカントの奥を締め上げて、それに気づいてさらに恥ずかしくなって、さらに締まって——

「ッ♡♡ んんっ♡♡ やっ、やだ♡♡ へんに、なるう……っ♡♡♡」

2本目の指が押し込まれた。きつい。壁が裂かれるみたいな圧。小さく悲鳴が上がる。でもカントは従順に指を受け入れて、透明な蜜がゲーミングチェアの黒い座面にぽたりと落ちた。

「お前のカント、もうびしょびしょだぞ。処女のくせに感じすぎだろ」

(男なのに……っ♡♡ カントを指で犯されて、こんなに濡らして……っ♡♡ 蓮さんの前で……チームのみんなに聞かれながら……っ♡♡♡)

蓮さんがスマホを取り出した。かしや、とシャッター音。蜜に濡れた結合部を——撮った。その音がマイクに乗って、チーム全員に届く。

「今の写真、チームのグループチャットに送るか？」

「やだ……ッ♡♡ それだけは——ああっ♡♡♡」

抗議の最中に指を奥まで突き上げられた。言葉が喘ぎに塗りつぶされる。カントの中がきゅうきゅうと指を吸い込んで、蓮さんの手の甲まで愛液が伝った。

親指がクリトリスを押し潰した。中の指が回転する。同時。上と中と奥——全部を一気に刺激されて、全身が弓の弦みたいに張り詰めた。

ゲーミングチェアが大きく軋む。

「いっ、いく——いっちゃ……っ♡♡ だめ、みんな聞いて——ひいっ♡♡♡♡」

(ああ、だめ——だめだめだめ♡♡ 蓮さんの指で、カントで、イっちゃ——♡♡♡)

壊れた。

全身がびくびくと痙攣して、カントが蓮さんの指をぎゅうぎゅうに締め上げた。初めてのアクメ。チームメンバー全員の耳に、僕のイク声が届いてる。

——なのに蓮さんは、指を抜かない。

余韻を与えず、感度が上がりきった内壁をさらに掻き回す。ぐちゅぐちゅと、いった後の過敏な粘膜が悲鳴を上げてる。

「1回目。まだ罰ゲーム終わってないから」

「やっ……あっ♡♡ まって、今いったばかり……っ♡♡ カント、おかしく……うんっ♡♡♡」